

科学研究費補助金基盤研究(A)

「グプタ朝以降のインド仏教における僧院と世俗性」

(課題番号:22H00002 英文タイトル:“Monasteries and Secularity in Indian Buddhism from the Gupta Period Onward”)

## ニュースレター第10号

### 写本文献資料研究班による国際ワークショップの開催

2023年9月8日から14日にかけて写本文献資料研究班主催の国際ワークショップが開催された。東京、京都の連続開催となった今回のワークショップは、ようやく海外研究者の招聘が叶い、コロナ禍からの本格的な回復を感じさせるものとなった。一方で近年慣れ親しんだ(慣れざるを得なかった)オンライン開催も併用し、海外からの出席者の事情も考慮し開始時刻を15時からに設定した。その結果、国内外からの多数のオンライン参加者も得て、対面の参加者と合わせて盛況となった。

ただし、大正大学総合仏教研究所で開始予定であったワークショップ初日は、予想外の台風襲来により主要メンバーの一部の東京到着が難しくなり、急遽オンラインのみの開催に切り替えるという不測の事態が生じた。けれども、そもそもオンラインも併用するハイブリッド開催にしていたことが幸いスムーズにオンライン開催に変更することができた。既に東京に移動していたメンバーはホテルから参加し、無事ワークショップ初日が始まる。宮崎の開会挨拶を皮切りに、望月海慧氏(身延山大学)の主導で*Sarvasamayasaṃgraha*の講読を進めた。*Sarvasamayasaṃgraha*は、*Dīpaṃkaraśrījñāna*(Atiśaとも)に帰せられる小品で、その内容は導入部と本論に大別できる。導入部では多くの論書を引用しながら真言乗の優位性が説かれ、本論では真言乗の三昧耶戒が20項目から解説される。今回のワークショップではテキスト冒頭から本論の項目列举の所までを読解した。

ワークショップは、台風の去った二日目からようやく本格的な対面開催となった。対面参加者が大正大学総合仏教研究所に集合し、オンライン参加者とともに、Bhikṣu Hejung氏(ハンブルク大学・中央僧伽大学校)の主導で*Jñānaśrīmitra*著*Sākārasiddhiśāstra*とRatnakīrti著*Citrādvaitapraśavāda*

を読解した。Hejung氏が取り上げたのは、かねてより注目されてきた*Jñānaśrīmitra*とRatnakīrtiというヴィクラマシーラ僧院の著名な師弟の関係である。両者の関係を慎重に吟味しつつ、*Sākārasiddhiśāstra*の平行箇所も扱いながら*Citrādvaitapraśavāda*の関連箇所を読み進めた。



Hejung氏による講読会の様子

東京最終日となる三日目は、Péter-Dániel Szántó氏(エトヴェシュ・ロラード大学)の主導で午前は*Ādikarmāvatāra*、午後は*Suhrillekha*を読解した。サンスクリット写本一本のみしか伝わらず、翻訳も存在しない未校訂のテキストである*Ādikarmāvatāra*は、初学者の実践儀礼を内容とし、紀元1200年頃のインドの在家仏教徒の日常的な実践を考える上で重要な資料となる。今回は冒頭から読解を始めた。*Suhrillekha*はナーガールジュナ(龍樹)の著作として伝わる。義浄訳『勸戒王頌』を含む漢訳三本とチベット語訳が現存し、その翻訳を利用しこれまでも研究が進められてきた。王に対する書簡という形を取るため、これも直接在家仏教徒に関係する。今回は現在Szántó氏が校訂を進めている新出サンスクリット写本を用いて、冒頭からその内容の再検討を開始した。

一日移動日において12日から京都大学で始まった京都でのワークショップもオンラインを併用し、東京と同様の形式で開催された。京都の三日間は、すべてSzántó氏が担当し、東京に続き*Suḥṛllekha*と*Ādikarmāvatāra*を読み進めた。出席者の興味によって予定を変更した回もあり、今回は*Suḥṛllekha*を集中的に読解し読了。*Suḥṛllekha*と*Ādikarmāvatāra*は時代も内容も異なるが、仏教の世俗性を考える上で多様な情報が含まれ、十分な成果が得られたと言える。また、対面で開催できたことも大きな成果に繋がったことに疑いはなく、かつての環境が戻ってきたことを喜ぶたい。一方で、オンライン開催にメリットがあることも確かである。状況や目的に応じてオンラインを利用しつつ、今後も本研究班の活動がより充実したものとなるように進めていくことになるだろう。



Szántó氏による講読会の様子

(報告:班責任者 宮崎泉 京都大学)

## 僧院建築儀礼に見られる僧院の世俗性

紀元5世紀以降にインドの宗教の表舞台に出てくる密教を含むタントラの宗教は、象徴性に富む秘儀的な実践に特徴があり、その実践を行うためには入門儀礼を経る必要があった。このことは密教が閉ざされたコミュニティ内で実践されてきたことを必ずしも意味しない。密教はタントラの宗教で最も勢力のあったシヴァ教に影響される形で、様々な公共分野における儀礼、すなわち施主の依頼により実行する儀礼を整備していった。このような儀礼の代表的なものがプラティシュターと呼ばれる儀礼である。

プラティシュターはその儀礼となる対象物を礼拝の対象など、宗教的な目的に合うものに「変質」させるための儀礼である。その対象の主たるものは尊像であるが、その他にも数珠などの法具、また寺院・僧院がある。

シヴァ教は、この分野の儀礼を規定する聖典である「プラティシュタータントラ」を整備した。仏教においてプラティシュタータントラに相当する聖典は存在しないが、「マンダラ儀軌」と称される一群の儀礼マニュアルが同じテーマを扱っている。最も浩瀚なマンダラ儀軌の一つにクラダッタ著『所作集註』がある。この文献は寺院建築の手順に沿う形で、密教の諸儀礼の規定を説いている。そして、『所作集註』は僧院と世俗性の関係に関して、以下のような興味深い視点を提供してくれる。

(1) 僧院の命名 シヴァ教においては、王がその権力を具現化したところの寺院を建築し、そこに自分の名前をとったシヴァ(リンガ)を祀ったが、同様のことは密教でも見られる。『所作集註』はその冒頭部において「僧院に名前をつけた施主は相応しい阿闍梨を見つけるべきである」と説いているが、これはシヴァリンガの命名と同様のことを述べていると考えられる。

(2) 施主としての王 このように僧院建築の施主として一番に考えられるのが王である。実際に『所作集註』では、「王は建築家・その補助者・見物客を様々なもので喜ばせるべきである」ことが説かれている。また、建築予定地から異物を除去する儀礼では、施主が役人を伴っていると書かれているが、このような記述はその施主が王であることを示唆している。

(3) 僧院の間取り 『所作集註』は、第4章において神殿を4タイプに分けて、それぞれの果報を説明している。類似の規定がヴァラーハミヒラ著『プリハットサンヒター』第53章に見られる。非常に興味深いのは、『プリハットサンヒター』の規定は神殿のプランに関するものではなく、王、最高司令官、皇太子などの住居に関する規定であることである。なぜ、宮殿の間取りが神殿の間取りに適用されているのか、その理由是不明であるが、僧院の世俗性を表している一面なのかも知れない。





ネパールの僧院の入り口

密教(仏教)においては、森雅秀氏による論攷(森 1991)があるが、管見の限り、近年ではこの分野の研究はほとんど見当たらない。一方シヴァ教の分野においては、Libbie Millsによ

るシヴァ教の寺院建築に関する研究がある(Mills 2019)。

今後、当該分野の文献の研究が進展し、その結果を考古学資料と突き合わせることで、僧院と世俗性に関する知見が深まることが期待される。

森雅秀. 1991. 「インド密教における建築儀礼—Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā和訳(1)」『名古屋大学文学部研究論集 哲学』37, 53-73.

Mills, Libbie. 2019. *Temple Design in Six Early Śaiva Scriptures: Critical Edition and Translation of the prāsādalakṣaṇa-portions of the Bṛhatkālottara, Devyāmata, Kiraṇa, Mohacūrottara, Mayasamgraha & Piṅgalāmata*. Institut Français de Pondichéry / École française d'Extrême-Orient. Collection Indologie 138.

(報告: 写本文献資料研究班 種村隆元 大正大学)

## 国際ワークショップの報告(特別寄稿: Petra Kieffer-Pülz氏)

2021年と2022年に、「独日共同による仏教僧院文化研究(第1部・第2部)」(Studies on Buddhist Monastic Cultures: German-Japanese Collaboration Parts 1 and 2)と題するワークショップが開催された。これらは、マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルクの南アジア研究・インド学セミナーのインド学専攻(2021年度はPetra Kieffer-Pülz氏が、2022年度はPhilipp A. Maas氏が担当)と、Vihāraプロジェクトとの共催によるものである。日本側からは、久間泰賢氏(三重大学)と小倉智史氏(東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所)がVihāraプロジェクトの代表として参加した。パンデミックのため、両ワークショップはオンラインで開催された(2021年3月17・24日、2022年3月16・23日)。開会・閉会の挨拶、Vihāraプロジェクトの概要説明のほか、2021年と2022年を通じて計8回の講演(質疑応答を伴う)が行われた。

2021年3月17・24日には、2人のドイツ人研究者、すなわちAnnette Schmiedchen氏(フンボルト大学ベルリン、ERC Synergy Grant DHARMA)とPetra Kieffer-Pülz氏(マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク、マインツ科学文学アカデミー)、および2人の日本人研究者、すなわち松岡寛子氏(オーストリア国立科学アカデミー・ライプツィヒ大

学)と菊谷竜太氏(京都大学)による4つの講演が行われた(※訳者注: これら4つの講演の詳細については第6号を参照)。質疑応答では、幅田裕美氏(国際仏教学大学院大学)、Jens-Uwe Hartmann氏(ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン)、Roland Steiner氏(同)が討論者を務めた。閉会の挨拶は小倉氏とHartmann氏が行った。

2022年3月16・23日には、ドイツ側からはCharlyn Edwards氏(ハンブルク大学)とPhilipp A. Maas氏(マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク)、日本側からは堀伸一郎氏(国際仏教学大学院大学)と慶昭蓉氏(京都大学)がそれぞれ発表した。久間氏と小倉氏が企画の趣旨を紹介し、Schmiedchen氏、Jowita Kramer氏(ライプツィヒ大学)、久間氏、笠井幸代氏(ルール大学ボーフム)が討論者として参加した。閉会の挨拶はKramer氏とMaas氏が行った。

講義の内容は多岐にわたったが、そのうちのいくつかは、種々の資料を考慮に入れつつ、仏教僧院とそれに関わる語彙を扱うものであった。Edwards氏はヴィプラシュリーミトラのナーランダー石碑文を検討した。この碑文はおそらく同地における最後の僧院に由来するものであるが、その僧院を寄進したのはソーマブラ大僧院の者である。同

## 今後の予定

2024年3月22日に、外部評価班の小倉智史氏によるオンライン研究会が開催されます。テキストはこれまで講読してきた、イルハン朝時代のペルシア語史書『歴史精髄』に含まれる仏伝です。今回は地獄に関する章を中心に、『長阿含経』『世記経』などと共に講読し、併せてペルシア語圏における仏典の伝播状況について考察します。研究会にはPegah Shahbaz先生(トロント大学)もお招きして、ご教示を仰ぐ予定です。

## 活動報告

2024年1月4日から22日にかけて、美術・建築・考古学研究班がインドでフィールドワークを実施しました。今回はMumbai地域の仏教僧院建築であるKanheri石窟などを対象として調査を行いました。その際、以前から本プロジェクトにご協力をいただいているPia Brancaccio先生(ドレクセル大学)も同行しました。

以上の活動の詳細については、ニューズレター第11号で報告する予定です。

氏は、この碑文を編集・翻訳・解説し、それを理解するための方法を議論した。

堀氏は、古ベンガル文字で書かれたサンスクリット写本の奥書の年代をもとに研究発表を行った。13世紀初頭にトルコ系イスラーム教徒によって東インドの主要な仏教僧院が破壊されたにもかかわらず、15世紀半ばまでビハール州の一部の農村地域で仏教徒が存続していたことを同氏は明らかにした。

慶昭蓉氏による発表「紀元後5-8世紀の天山山脈南方の仏教僧院」は、考古学的・文献学的資料を基礎とする。慶氏が焦点を当てたのは、漢文・史書・発掘文書を典拠として辿ることのできる、タリム盆地(中国・新疆ウイグル自治区)の北縁に位置する仏教僧院群とそれらの発展である。さらに同氏は、現在のトルファンとクチャ周辺のいくつかの遺跡の経済的基盤を詳細に調査することで、唐王朝(618-907年)による征服後の制度的な変化を追った。

様々な個別のテーマに関する研究発表を行った者もいた。Maas氏は、「初期仏教徒と非仏教徒の瞑想の空間的・身体的側面」をテーマとして、瞑想の実践を扱った。同氏は、近代以前の南アジアにおける瞑想修行に関する初期の明確な文献的言及、すなわちパーリ聖典(紀元前4-紀元前1世紀)に残る簡潔なストックフレーズから始めて、パーリ聖典の注釈文献(紀元後5-6世紀)、出土品、「根本説一切有部律」とアシュヴァゴーシャの『ブッダチャリタ』などを検討し、仏教の瞑想の体勢が少なくとも紀元前1世紀以降に実践されたものであることを特定した。さらに、初期の仏教の瞑想における空間的および身体的な側面についてより包括的なイメージを描くために、「声聞地」や『大智度論』に見られる、仏教の瞑想に関する極めて広範な記述を分析した。さらに、初期の仏教徒の瞑想の体勢とその実践に相応しい場所をめぐって生じてきた諸概念を、初期の非仏教徒の記述と比較することで、初期の非仏教徒の瞑想の実践は仏教のそれから深い影響を受けた可能性があるという結論づけた。

上記の発表者のうち、4名(Edwards氏、堀氏、Kieffer-Pülz氏、Schmiedchen氏)はフンボルト大学ベルリンのAsien- und Afrika-Studienシリーズ(2024年刊行予定)に寄稿し、それ以外の何名かは他の出版物において内容を公表済みである。

残念ながら、これらのワークショップがマルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク南アジア研究・インド学セミナーのインド学専攻の最後の活動となった。同大学の学長やザクセン=アンハルト州科学省に対する世界的な抗議があったにもかかわらず、インド学専攻の閉鎖が決定されたのである。かくして、1833年以來の伝統に彩られたこの教育機関の長い歴史は、残念ながら幕を閉じることになった。

(報告: Petra Kieffer-Pülz マインツ科学文学アカデミー)

(和訳: Vihāra Project事務局 田代恭菜・三輪悟士・久間泰賢)

[ヴィハーラ プロジェクト]

印刷 株式会社コムラ **Vihāra Project 第10号**

科学研究費補助金基盤研究(A)

「グプタ朝以降のインド仏教における僧院と世俗性」ニューズレター

編集・発行 Vihāra Project 事務局

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577 三重大学人文学部 久間泰賢研究室内

2024年3月15日発行

